序

一九八九年から九〇年にかけて、世界はソ連を中心とした社会主義圏が、文字どおり音をたてて崩壊していく様を驚きをもってみていた。

ソ連の経済システムの行き詰まりと、世界共産化を目指した拡張主義対外政策の放棄は、軍事的圧力によりソ連と結びつけられていた東欧社会主義政権をあいついで動揺、崩壊させはじめた。

一方アジアでは西側経済への接近により経済の近代化を図っていた中国で、社会主義体制そのものへの疑念が知識人・学生らを中心に高まっていた。この動きは一九八九年六月四日の天安門前広場での流血の弾圧により一時阻止されたものの、世界的な社会主義システムの動揺は、早晩再び中国社会主義政権をゆさぶることは確実であろう。

こうしたソ連を中心として発展してきた社会主義陣営の激しい動揺は、第二次大戦後ソ連勢力の拡張に対抗し、一〇万人を超える米軍兵士の血と巨額のドルを費したアメリカの反共戦略が、ようやく輝やかしい勝利の果実をえたことを意味しているようにみえる。

もちろんソ連社会主義はいまだ自からの敗北を認めたわけではないし、中国指導部も同様である。ほかにも朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、ベトナム、キューバなどの社会主義政権、さらに第三世界の民族主義的諸政権のいくつかは社会主義的経済システムを今後も維持し、アメリカをはじめとする資本主義先進諸国に対決的な姿勢をとりつづけよう。

しかし社会主義体制の西側世界に対する脅威が今や政治的にも、経済的にも大きく低下していることは明らかである。そしてこの社会主義の後退に、第二次大戦後のアメリカの歴代大統領の政策が大きな役割を果たしたことは否定しえないであろう。一九八九年以降の出来事はアメリカのソ連に対する勝利を示している。

とはいえ今、アメリカの第二次大戦後の反共政策の勝利を手放しで喜ぶには、いささか抵抗感が残る。アメリカの反共政策はあまりにも大きな犠牲を、アメリカ国民にも、またベトナムのようにアメリカが反共のために介入した国々の民衆にも、押し付けることになった。この政策はまた、常に先見の明のあるものでもなかったし、多くの失敗もなされた。

本書は、第二次大戦後のアメリカの対ソ戦略を中心とした世界戦略のなかでの対アジア政策について、主に一九五〇年代から現在までの時期を追跡し、何が起こったかをできるだけ正確に整理しようとする。そのことによって以上に述べた判断が事実をもって裏づけられよう。読者のなかには、筆者のもの事の整理の仕方が単純すぎると思う人もいるかもしれない。しかしアメリカ大統領は常に複雑な問題を単純化して決断せねばならないことを想起する必要がある。

まず第1章で、一九五〇年の朝鮮戦争を契機に全世界的に展開したアメリカの反共政策が、すでに五〇年代末までにいかに大きなコストをアメリカに押し付けたかを明らかにする。これにより六〇年代以降の反共政策を遂行するうえで、アメリカは早くも大きなハンディを負わされていたことが理解されよう。